

線形代数 I (担当 松下勝義)

教科書 §2.3-2.4, pp.13-26

II. 行列の階数と階段行列, 連立方程式の解

講義ノート

連立一次方程式は解が一意に定まるとは限らない. 場合によっては解が ∞ 個ある場合や, 解がない場合が存在する. これらの場合でも係数行列 \hat{A} は階段行列に行基本変形で変形できる. そしてそれを利用し解を求めることができる. 今回はこれらの場合の行列による解法を述べる.

- 階段行列次のような行列を階段行列と呼ぶ. ピボットという値が 1 の成分が存在しそれが以下の条件を満たす.
 1. ピボットがない行のすべての成分は 0
 2. ピボットより左にある成分はすべて 0
 3. ピボットのある列の列番号を p_i としピボットを含む行の数を r ($< m$ で m は行列の行の数) とすると

$$p_1 < p_2 < \cdots < p_{r-1} < p_r. \quad (67)$$

そして各ピボットを含む列ベクトルの成分はピボット以外で 0.

- 基本変形による階段行列への変形と階数
行列 \hat{A} は行基本変形で階段行列 \hat{B} に変形できる. このとき階段行列のピボットの数 r を $\text{rank}(\hat{A})$ と書き行列の階数と呼ぶ.
- 拡大係数行列の係数行列 \hat{A} の列数 n と階数 r に対して以下が成り立つ.
行基本変形で係数行列が階段行列 \hat{B} とベクトル d からなる拡大係数行列へ変形できたとする.

$$\left(\hat{A} \quad b \right) \Rightarrow \left(\hat{B} \quad d \right) \quad (68)$$

- $d_{r+1} = \dots d_n = 0$ ではない. \Rightarrow 解なし
- $d_{r+1} = \dots d_n = 0$ かつ $r=n$ 解が一つ存在する.
- $d_{r+1} = \dots d_n = 0$ かつ $r < n$ 解が ∞ 個あり未定定数 $n-r$ 個で書ける.

- 解が一意に定まる場合 (例題 2.4(1))
連立一次方程式

$$\begin{cases} x - 2y - 3z = 4 \\ 2x + 3y + 4z = 4 \\ 3x - 4y - 7z = 10 \end{cases} \quad (69)$$

拡大係数行列の係数行列を行基本変形で階段行列へ変形する.

$$\begin{pmatrix} 1 & -2 & -3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 4 \\ 3 & -4 & -7 & 10 \end{pmatrix} \Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & 0 & 0 & 3 \\ 0 & \boxed{1} & 0 & -2 \\ 0 & 0 & \boxed{1} & 1 \end{pmatrix} \quad (70)$$

この場合階段行列は単位行列 \hat{I}_3 になり, d の 0 ではない成分の数は 3, r も階数 (ピボット数) が 3 であり d_4 等はなく 0 とみなしてよい. 列の数 3 であるから解が一意であることがわかる.

- 解が無限に存在する場合 (例題 2.4(2))

$$\begin{cases} x - 2y - 3z = 4 \\ 2x + 3y + z = 1 \\ 3x - 4y - 7z = 10 \end{cases} \quad (71)$$

拡大係数行列の係数行列を行基本変形で階段行列へ変形する.

$$\begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 2 & 3 & 1 & 1 \\ 3 & -4 & -7 & 10 \end{pmatrix} \Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & 7 & 7 & -7 \\ 3 & -4 & -7 & 10 \end{pmatrix} \quad (72)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & 7 & 7 & -7 \\ 0 & 2 & 2 & -2 \end{pmatrix} \quad (73)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 2 & 2 & -2 \end{pmatrix} \quad (74)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (75)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (76)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & 0 & -1 & 2 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (77)$$

より $d_n \neq 0$ の数がピボットの数 $r = 2$ と一致している. また列の数 n は 3 で解が ∞ 個あり未知定数 c 一つで解が書けることが分かる. $z=c$ とすると

$$\begin{pmatrix} \boxed{1} & 0 & -1 \\ 0 & \boxed{1} & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ c \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (78)$$

より

$$\begin{cases} x - c = 2 \\ y + c = -1 \end{cases} \quad (79)$$

となる. よって解は

$$\begin{cases} x = 2 + c \\ y = -1 - c \\ z = c \end{cases} \quad (80)$$

である.

- 解が存在しない場合 (例題 2.4(3))

$$\begin{cases} x - 2y - 3z = 4 \\ 2x + 3y + z = 4 \\ 3x - 4y - 7z = 10 \end{cases} \quad (81)$$

拡大係数行列の係数行列を行基本変形で階段行列へ変形する.

$$\begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 2 & 3 & 1 & 4 \\ 3 & -4 & -7 & 10 \end{pmatrix} \Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & 7 & 7 & -4 \\ 3 & -4 & -7 & 10 \end{pmatrix} \quad (82)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & 7 & 7 & -4 \\ 0 & 2 & 2 & -2 \end{pmatrix} \quad (83)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & 7 & 7 & -4 \\ 0 & 1 & 1 & -1 \end{pmatrix} \quad (84)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 7 & 7 & -4 \end{pmatrix} \quad (85)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & -2 & -3 & 4 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 3 \end{pmatrix} \quad (86)$$

$$\Rightarrow \begin{pmatrix} \boxed{1} & 0 & -1 & 2 \\ 0 & \boxed{1} & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 3 \end{pmatrix} \quad (87)$$

より $d_n \neq 0$ の数が 3 で階数 (ピボットの数) $r = 2$ より大きい. そのため解はない. 実際解 (x, y, z) が存在するとすると,

$$\begin{pmatrix} \boxed{1} & 0 & -1 \\ 0 & \boxed{1} & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 3 \end{pmatrix} \quad (88)$$

より

$$\begin{cases} x - z = 2 \\ y + z = -1 \\ 0 = 3 \end{cases} \quad (89)$$

となるため最後の式が矛盾してしまう.